

第1回



平成24年度

国 語

注 意

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入下さい。
3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書き下さい。
氏名にはふりがなを忘れないこと。
4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
6. 質問があれば、だまって手をあげ下さい。
7. 問題用紙も解答用紙といっしょに出し下さい。問題用紙の余白は
下書きに利用してもかまいません。
8. 文字は濃くていねいに大きく書き下さい。消しゴムを使ったあとは
余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書き
下さい。

受験番号				ふりがな	
				氏 名	

一

次の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 兄と二人で事業を企てる。
- ② 運動会で我が組は隣の組に惜敗した。
- ③ やむを得ず会長に直訴する。
- ④ 使用したコップは煮沸して消毒しておく。
- ⑤ 彼とは十年來の知己である。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 結婚して新しい家庭をキズく。
- ② 製品の注文がサットウする。
- ③ 国の経済活動のキカンとなる産業だ。
- ④ 悪口を言って他人をチュウショウする。
- ⑤ その罪は黙ってカンカできない。

次の1～5の言葉の組み合わせと同じ関係を持つものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

1 加熱 — 冷却

ア 炒める — 煮る
イ 着工 — 起業
ウ 儉約 — 質素
エ 収縮 — 膨張
オ 袖の下 — 鼻薬

3 鬼才 — 才能

ア 予算 — 予定
イ 名勝 — 景色
ウ 有終 — 結末
エ 試練 — 鍊金
オ 努力 — 道楽

2 生前 — 存命

ア 感謝 — 御礼
イ 一望 — 願望
ウ 防水 — 耐圧
エ 困難 — 無難
オ 不易 — 流行

4 自然科学 — 化学

ア 勉強 — 学問
イ 質問 — 回答
ウ 墨汁 — チョーク
エ 特急 — 急行
オ 魚類 — メダカ

5 料理 — 台所

ア 運動 — グラウンド
イ 治療 — 寝室
ウ 便利 — コンビニエンス・ストア
エ 郵便 — 銀行
オ 洗面所 — 化粧室

四

次の文章（下畑卓の小説「煉瓦の煙突」〔昭和一五年〕）を読んで、後の問いに答えなさい。

「これが、今日からみんなの新しい友だちになる大河原三郎右衛門君です。」

と先生に聞かされると、教室内は笑聲にへ①ゆれた。けれども短いかすりの着物を着た三郎右衛門は、その中につつ立って、笑いもしなかった。組のものが、ふと「ああ、西郷さんに似ている。」と、そんなことを考えたが、笑聲はなかなかやまない。無理もないのである。この工場街の子供たちには、これは簡単に笑いやめられぬ奇妙な名前なのであった。②

転校して来た大河原三郎右衛門は、その名のようにまったくの田舎者である。だから身体中から、何かちがった匂いがした。組のものは「これが土の匂いかも知れぬ。いや、田舎者の匂いだ。」と思ったりした。その日一日中、みんなは工場の煙にすすけた教室や、せまい運動場の片隅で、三郎右衛門をとりかこんで話しかけた。

③「電車に乗ったことあるかい。」

「ううん。」

④「じゃ、エレベーターは？」

三郎右衛門には、それが何のことかわからず、目をへ2へさせたまま口をどじていた。皆はへ3へ声をあげて笑った。

三郎右衛門の返事は「うん。」「ううん。」の二つにかぎられていたが、時には言葉すくなにものをいった。しかし、それはこの町の子供たちにはわからぬ鹿児島言葉であった。それを聞きたさに「なに？ 今何をいった？」と何度も何度も聞き返し、いわせて笑う意地の悪いのもいた。皆はものをいうおもちゃを見つけてもしたように、三郎右衛門をかこんではやしたてた。

四五日学校へ通っているうちに、三郎右衛門は組のものから「サンモン」とよばれるようになった。このよび名は、皆から「田舎者」と同じように使われ、「薄馬鹿」と同じように考えられていた。しかし、そうよばれても三郎右衛門はべつだんおこりもしなかった。といって笑いもしなかったが、時に笑うと、小さなえくぼが陽やけした頬に浮くようにできた。

そのうち誰が調べて来たのか、三郎右衛門のお父さんは川向こうのセメント工場に働いており、家は工場の向こうにある十軒長屋（注①）だという噂がたった。十軒長屋というのはこの工場街のはずれにあつて、沼地に面して建っているきたないので有名な長屋である。皆はその噂をたしかめせず、本当だと思った。それ以来「サンモン」というよび名には、貧乏できたないという気持も加わって、皆からよばれるようになった。そのくせ三郎右衛門は着物ではあつたが、さっぱりしたかすりの着物を着ていたし、よくひとりで教室の掃除当番をした。「おなかが痛い。」とか「一寸用事があるから。」といった、同じ当番のものがいなくなつても、三郎右衛門はだまってひとりで掃除をした。それはまるで掃除をたのしんででもいるように不平一ついわずにわなかつた。また、こんなこともある。教室備附のほうきが二本も足りなくなつたといつて、当番のものが大さわぎをし、探し廻つた時に、三郎右衛門は残つた一本のほうきで、教室の掃除をきれいにすませた。それ以来、組のものは「サンモンは掃除が好きなのだ。」ときめてしまった。そしてよく「サンモン」ひとりに掃除をさせた。「サンモン」が時にめずらしく「サンモンさん。」と、皆からいいねいによばれることがある。しかし、それはドッチボールの球が学校のとなりの工場へとび込んだ時に限られていた。へ4へ舌を出して、「サンモンさん。拾つて来てくれ。」と誰かに頼まれると、三郎右衛門は急ぎの用でもするように急いで走つた。皆はきまつてくすくす笑いをしたが、三郎右衛門はなぜかにつこり笑つていて、誰も気のつかない光った玉のようなえくぼを浮かせていた。皆は「サンモンが薄馬鹿だから、喜んでいやなことをするのだ。」と思つていた。

なるほど、こんなことから考えると、三郎右衛門は薄馬鹿のようにも思えたが、ぜつたにそうでないことを、となりに坐つて⑤いる彦三がよく知っている。それは三郎右衛門が読方も算術も宿題はかならずして来て、それにまちがいが少なかったことを知っているからであつた。そのために実は彦三が、ずいぶんとな目にあつてゐる。どうしたわけか、三郎右衛門は皆のように手を高くあげて、

「先生、ハイ。先生、ハイ。」

と叫ぶのがきらいで、その役はいつも彦三が引うけていた。

「この問題は難しいね。ちよつと答だけ見せて——」

という、三郎右衛門はだまって帳面を彦三の方に突き出した。しまいには、もう面倒になって来て、彦三は帳面をとりかえても、らうようにさえた。しかし、そのことも彦三がひみつにしていられないし、三郎右衛門もべつだん組のものにいわなかった。長い間知れなかったが、それもだんだん知れて来て「サンモンは田舎者ではあるが、薄馬鹿ではない。」ということになって来た。風が涼しくなった頃に、この組のものは、電車賃六十銭（注②）を使って、ゆかいな遠足に行ったことがある。それにはもちろん三郎右衛門も、新しいかすりの着物を着て出かけた。行く時はキャラメル、チョコレートとさわがしく、帰る時にはおみやげだ、お菓子だにぎやかな電車の中で、ひとり三郎右衛門だけは、おとなしく窓の外を走る農家の白壁などを見ていた。誰かが「サンモンは、何もおみやげは買わないのかい？」と聞くと、「先生はお菓子もお金も持って来るなといわれたから。」と小さくつぶやいた。はつはつはつと、それを聞いたものは笑ったが、それは笑う方がまちがっているのであった。先生はその前の日に、たしかに組中のものにはつきりと、そういわれていたのである。

そんな遠足があつてから四五日して、三郎右衛門は一週間ほど学校を休んだ。

「あんな西郷さんのような身体で、病氣などするはずはあるまい。」

と思つてゐるうちに、三郎右衛門はひよつこりまた元気な顔を出して、「国へ帰つていた。」と短くいつた。誰よりも彦三は喜んだ。

そしてしばらく上らなかつた手を「先生、ハイ。」と高くあげはじめた。

それ以来、三郎右衛門はなぜかますますものをいわなくなつた。しかし誰もそれに氣をつけようとはしなかつた。

それからしばらくして、三郎右衛門が川向こうの町を、夕方、新聞配達（注③）をして走つてゐるのを見たというものが、組の中に出て来た。「うそだ。」「本当だ。」と組中がけんかのようになつたので、三郎右衛門にじかに聞くと、

「うん。家が多くてわからん。」

と、ただそれだけいつて笑つてゐた。それから、組中のものが「サンモン」をよぶ時には、犬でもよぶようなよび方をした。三郎

右衛門は、それでも別におこりはしなかつた。それ以来彦三は、相変らず宿題を見せてもらつてはいたが、遊ぶ時間にはあまり三郎右衛門に近づかぬようになった。

ある日一日中、彦三が手をあげなかつたことがあつた。彦三は「どうしたのだい？ サンモンさん。」と何度もたずねたが、三郎右衛門は一言もものをいわなかつた。すると、何かにおこつて、これから宿題を見せてくれないに違ひないと思つたのか、彦三はしくしくと泣きはじめた。三郎右衛門は、それにびつくりして、あわてて何でもないので彦三の背に手をやつた。その時、こぼれるように三郎右衛門は涙を落した。それはもとより彦三の氣づくことではなかつたが、三郎右衛門はたしかに泣いてゐたのであつた。

その「何でもないので。」といったことが、四五日して学校の朝礼で、全校生徒に話され、「まあ、あの五年生にゐる田舎のおじいさんのような名前の人のお父さんが。」と、さわがしくさせてしまつた。これには三郎右衛門の組のものも、今さらのように驚いた。そして列中にかすりの着物をさがした。「サンモン」は、いつもとちがわず氣をつけをして、校長先生の方を向いてゐた。校長先生の手には一枚の新聞がにぎられており、それには大きな活字で、岩山の一角をただ一人になつても死守し通し、全軍の危機を救つた後、戦死してた一兵士のこと書かれてあつた。名は「大河原次郎右衛門」となつてゐた。それは三郎右衛門のお父さんの名であつた。

その日は、組中のものの氣持は少しも落着かず、休み時間になると三郎右衛門をとりかこんだ。そして、サンモンさん、サンモンさんとよびかけて話したが、三郎右衛門は相変らず「うん。」「ううん。」と答えるだけであつた。しまいには、もううるさくなつたのか、三郎右衛門は便所から裏庭の方へかくれたが、組のものは手わけしてさがしに来た。彦三は今日一日中、三郎右衛門のこゝとを大河原君とよんだ。しかし三郎右衛門は、どうよばれようとも返事は変らぬ同じ返事であつたし、三郎右衛門その人も、もとより同じ三郎右衛門であつた。

⑩ 組のものはその日の放課後、列を作つて、噂に聞いた十軒長屋の三郎右衛門の家を訪ねて行つた。家は十軒長屋の端だったが、

よく掃除が行きとどいているのか、とつてつけたようにきれいであった。皆は、まずきたくないのに驚きもしたが、今はかえってそれがあたりまえのようにも思えた。みがかれた戸の上には、新しい表札がかかっていて、大河原三郎右衛門とサンモンの名が書かれてあった。皆はいい合せたように、それを見上げた。

「大河原君、大河原君。」

誰かが、そういつてよんだ。皆はだまって、三郎右衛門の出て来るのを待っていた。工場の煙がひくく流れて、皆をつつみこんでいる。

「大河原君、大河原君。」

二三人が、口を合せて叫んだ。聞きなれぬよび名が、皆の耳の中で鳴りひびいた。しかしいつまでたっても戸は開かなかった。三郎右衛門は、その頃煉瓦の煙突が影を落している工場街の一軒一軒へ、夕刊を配っていたのである。夕刊には戦っている日本が、大きな活字で印刷されてあった。

(注①) 長屋：一棟の細長い建物をいくつか区切って、それぞれを一戸とした住宅。

(注②) 銭：日本の昔の貨幣単位。円の百分の一。

(注③) 新聞配達：かつては未成年者でもこのようなアルバイトをした。法的な規制も現在から比べると甘かったと思われる。

問一へ 1 へ 4 へ に入る言葉を、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア わあつと イ きよとんと ウ じくじくと エ どつと オ べろつと

問二——線部①「西郷さんに似ている」について。「組のもの」が似ていると考えた「西郷さん」として、最も適当と思われる

ものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 幕末・維新の政治家としての、勇猛果敢な「西郷さん」。

イ 江戸城の無血開城を果たした、庶民の英雄的な「西郷さん」。

ウ 西南戦争に敗れて自刃した、悲劇のヒーローのような「西郷さん」。

エ 上野公園にある銅像のように、和装で立っている「西郷さん」。

オ 鹿児島市内にある銅像のような、近代の軍人としての「西郷さん」。

問三——線部②「ちがった匂い」とあるが、何とちがっているのか。最も適当と思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 先生の背広から臭う煙草の匂い。

イ セメント工場の湿気くさい匂い。

ウ 十軒長屋から漂ってくる貧乏臭さ。

エ 三郎右衛門のもつ土の匂い。

オ 工場街の子供たちの匂い。

問四 — 線部③「電車に乗ったことあるかい。」④「じゃ、エレベーターは？」は三郎右衛門が何であることを確認するための質問と思われませんか。本文中より八字で抜き出して答えなさい。

問五 — 線部⑤「知っている」の主語を文中の言葉で答えなさい。

問六 — 線部⑥「その」の指示する内容を文中の言葉六字で答えなさい。

問七 — 線部⑦「国」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一つの政府が治めている一定の土地。国家。
- イ 生まれ育ったところ。ふるさと。
- ウ 漠然としたある地域。
- エ 昔の日本の行政区画。
- オ 大名の領地・任国。

問八 — 線部⑧「誰よりも彦三は喜んだ」理由として最も適当と思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ただ一人の親友・三郎右衛門が一週間ぶりに登校してきたから。
- イ 三郎右衛門のいない間、さびしい思いをしていたから。
- ウ また授業中に三郎右衛門の帳面を借りることができるから。
- エ ふたたび三郎右衛門をからかうことができるから。
- オ 三郎右衛門が一週間ぶりに元気に登校してきたから。

問九 — 線部⑨「ものをいわなくなった」理由として最も適当と思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 学校でのいじめやからかいに嫌気がさしてきたから。
- イ 鹿児島の言葉がなかなか抜けきらなかったから。
- ウ 彦三以外に心を開ける組のものがいなかったから。
- エ 戦地で戦っている父親の安否が気遣われたから。
- オ 戦っている日本のことが心配でならなかったから。

問十 — 線部⑩「組のものはその日の放課後、……三郎右衛門の家を訪ねて行った」理由として適当と思われるものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三郎右衛門に今までの非礼を詫びて、彼が夕刊を配るのを皆で手伝うため。
- イ 国のために戦って亡くなった三郎右衛門の父親の冥福をお祈りするため。
- ウ 大河原家の戸主がだれになったのかを調べに行くため。
- エ 戦争で父親を亡くした三郎右衛門にお悔やみをいうため。
- オ 噂通り、十軒長屋に三郎右衛門の家があるかどうかを確認するため。
- カ 学校だけではあきたらず、家まで押しかけて三郎右衛門をいじめるため。
- キ 三郎右衛門に対して行ってきた数々の無礼を彼の母親の前で陳謝するため。

問十一 ―線部②、③ それぞれの「サンモンさん」に込められた気持ちを説明した文として適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 名譽の戦死を遂げた父親を持つ三郎右衛門への最大級の敬意の表れから、今まで使ったことのない呼び名で呼んだ。
イ 国家のため父親が犠牲となったにもかかわらず何の補償も受けられない三郎右衛門をあわれむ気持ちから、「サンモンさん」と呼んだ。

ウ 無口な三郎右衛門からいろいろ聞き出したため、普段通り「サンモン」と呼びつけるわけにもいかず、機嫌をとるため「さん」付けで呼んだ。

エ 誰もが敬遠する厄介な出来事を三郎右衛門に引き受けてもらう負い目から、「サンモンさん」と呼んだ。
オ となりの工場の工員に叱られることも厭わない三郎右衛門の勇気への称賛から、「さん」付けで呼んだ。

カ となりの工場までわざわざボールを拾いに行くのを面倒がらない三郎右衛門への感謝の念から、今まで使ったことのない呼び名で呼んだ。

問十二 三郎右衛門の性格について述べたものとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嘲笑やからかいの数々をものともしない三郎右衛門は忍耐強い男の子だ。

イ 他人のために尽くすことをいとわない三郎右衛門は実に寛容な人だ。

ウ 父親が亡くなったことにもほとんど動じない三郎右衛門は愚鈍な人間だ。

エ 宿題をかならずやり、先生のいいつけも守る三郎右衛門は真面目な男子だ。

オ 教室や家などせつせと掃除する三郎右衛門はきれい好きな少年だ。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が人間の一生を考えるにあたって、もっとも示唆的だと思うのは、『ツアラトウストラはかく語りき』に語られているフリードリッヒ・ニーチェの精神の三様の変貌（へんぼう）という思想である。

人間の精神は、三様の変貌をとげるのである。精神は最初、ラクダの形で現れる。ラクダとは何か。^①ラクダは重い荷物を背負って、乾き切った砂漠を歩く。ラクダの精神の特質は忍耐である。

忍耐とは何か。忍耐とは、黙々と自己に与えられた義務を果たすこと、ある困難なことが成し遂げられようとする時、そのことから、おしげもなく、別れを告げることであると、ニーチェはいう。ラクダは自己にあらゆる困難を課し、それに耐える精神である。ラクダは重い荷物を背負って、千里の砂漠を歩くが、その旅の途上で、ラクダは突如としてライオンに変貌する。ライオンとは何か。ライオンは戦いの獣である。彼は、砂漠の中で、ドラゴンと戦う。そのドラゴンの黄金のうろこの一枚一枚には、何百年何千年の価値が光り輝いている。ライオンは、必死の勇気で、この何百年何千年にわたる価値に輝くドラゴンと戦うのである。ライオンの精神の特徴は勇気である。

しかし、このライオンですら、十分ではないのである。ライオンはいつか、小児とならねばならない。

小児とは何か。小児はちょうど、将棋遊びをするように無邪気に創造するものである。小児の心を支配するものは遊びの精神であり、^②小児は全く無邪気に、一切を始め、一切をつくるのである。それでいて、小児はライオンの成し遂げないことをすることができる。創造は、小児にのみ許された特権である。

私は若き日、ニーチェのこの言葉を読んで、心をうたれた。人生はすべからなくあり、かくあらねばならぬと私は思った。

ニーチェの語った人生の三段階説は、人生の理想であることはまちがいない。人生が、もし一つの完成した人生であるならば、人は三つの段階をへなければならぬ。ただ、学者や芸術家のみではなく、政治家や実業家も商人も農民もあらゆる人が、その人

の人生が眞の人生である限り、ニーチェの三つの段階をへなければならぬと思う。

人生は、ただ向こうから与えられているものではない。自ら創つてゆくものである。

自ら創つてゆくには、やはり三つの人生の段階が必要なのだ。ラクダの人生とライオンの人生と小児の人生。いいかえれば、忍耐の人生、勇氣の人生、そして創造の人生である。

もちろん創造の人生が、人生の最高段階である。しかも創造といつても、特定の人ばかりがすることではない。少数の学問や芸術、政治や経済の天才ばかりが、創造の秘儀に参加するのではない。

すべての人が、それぞれの立場で、多かれ少なかれ創造の秘儀に参加するのである。そしてこの創造の秘儀には、大きな喜びが含まれているのである。

(中略)

われわれの生活はたえざる創造なのである。今日、会社でどういふふうに働くか、今日、家庭でどういふ料理をつくるか。それも一つの創造作業である。

キリスト教では、神は、世界を創つたという。もし、そうとすれば、われわれは、創造ということによって、神の作業に参加することができるのである。創造によつて、われわれが、神が味わつたであろう喜びを味わうことができるのである。

ニーチェのこの精神の三段階の説は、そういう創造に至る道を教えようとするのである。

人は、一氣にして、物を創造することはできない。創造するには、長い修練の時代が必要なのである。じつさい、人類は現在まで、長い歴史をもつてきた。そして、その何万、何十万年という長い歴史の時間の間に多くの知識を習得したのである。創造というのは、この知識の長いストックの上に、何かをつみ重ねることである。

それが可能なためには、この人類の実に長い間の知識のストックを己のものにしなければならぬ。それが、ニーチェのいうラクダの時代なのである。

ラクダの時代は苦しい。知識の習得というのは、大変退屈なことである。学生時代はまさにこのラクダの時代である。受験時代も、もとよりラクダの時代のうちのラクダの時代である。受験という目的のために、全く、Xというべき勉強に耐えねばならない。

おそらく、諸君の誰もが、この勉強の、特に受験勉強の味気なさに耐えられない思いをしたにちがいない。なぜ、こんな、面白くない勉強をしなくてはならないのか、と。

それは当然の疑問であり、私も、何度かそういう疑問を持った。そして、私も、何度か受験に失敗した。

ラクダの修行は必要か、特にラクダのうちのラクダ、もつとも面白くない受験勉強が必要かと、諸君は問うかもしれない。

それについて今の私は、はっきり答える。ニーチェがいうように、^④やはりそれは必要であると。長い間のラクダの修行をへずして、どうして、人間はライオンに、そして、どうして人間は小児になれるのか。

ラクダの中のラクダ、もつとも面白くない受験勉強を、十分できないような人間がどうして、自ら他日ライオンになり、小児になれるのか。

もとより結果は別である。受験の結果がすべてではない。現在でも、ほんとうに創造的な仕事をしている人の中に、多く、学校へ行っていない人や、受験勉強に失敗した人がいる。それは、そうであるが、その人たちも、別の意味で、長くてつらいラクダの生活に耐えて、別な仕方ではライオンになり、小児になった人である。ラクダの生活を軽蔑してはいけない。

君がたとえ強いライオンや無邪気な小児になれなかったとしても、せめて君はよきラクダとなれ。それだけでも、すでに、よき人生なのである。よきラクダは、弱いライオンや、^Bニセの小児より、何倍かすばらしい存在なのである。

★人間が創造するには、一度は世界を敵としなければならぬ。創造とは所詮、^⑤孤独な作業である。もし、人がほんとうに眞理を発見したとすれば、彼は、全世界を敵としなければならぬ。なぜなら、この時点において、彼一人が眞理を所有しているのである。つまり、全世界のうちで、この点について、彼一人のみが眞理を所有し、他のすべての人間が誤謬を所有することになる。

もう一ついえば、彼以外のすべての人は、今まで彼が真理として大切にしていたものを、彼によって誤謬と宣言されたことになる。この行為にたいして、すべての人が怒りをもちたないはずはない。

真理の探究は全く孤独な仕事なのである。彼は、全世界を敵にしても、あえて戦うことのできる孤独な勇気を自己の中にもたねばならない。

ライオンは、この孤独な勇気の特徴であるが、一つの真理を創造するには、やはり誤謬との戦いが必要である。そして、この場合たいてい、一人の認識者において、真理創造の時期に、誤謬との戦いの時期が先行するのである。

まさに、^⑥食うか食われるかの壮絶な戦いを、認識者は行わねばならない。

それは、いわば危険な時代である。ラクダは退屈のあまり、その仕事をやめようとするが、ライオンは壮絶な戦いの中で、傷ついたり、死んだりする。そして多くのライオンは、この戦いのはげしさを恐れて、いつの間にか、ネコや、イヌに変身した。しかし、ほんとうに小児になるには、人はこのライオンの苦しい修行^⑦をへなければならぬ。

(中略)

戦いは、一人で、全く一人でしなければならぬ。もしも真理が味方であるならば、それにまして力強い味方はないではないか。そして真理一人を味方にして、孤独でひるまない戦いをする時、必ず、人間も味方になるのである。もしも、誰一人味方がないならば、あなたがまだほんとうに、真理を味方にしていないからである。

神ばかりか人間も、けつして、真理のために戦っている人間を見捨ててはおかないのである。

また、たとえ味方がなくても、真理のために戦うことはそれだけで、すでに十分楽しいことではないか。

諸君は余りに早くライオンになろうとしてはいけないが、ライオンの時がきたら、諸君は、十二分にライオンにならねばならぬ。すべての世界を敵にしても戦う勇気をもつ苦難の時をもたずして、どうして創造の甘い果実を味わうことができるか。

そして、その苦難の日をへて、創造の日が来るのである。この創造の日は、自ら求めて来るものではない。ライオンは、長い苦

しい戦いを、懸命に戦っているのみである。おそらく、人間として可能なるあらゆる努力を、彼はするのであろう。

(中略)

人生の最高の段階は小児の段階なのである。それは、象徴的にいえば、時の止まった段階なのである。つまり、それは一瞬一瞬が喜びであり、一瞬一瞬が充実しているのである。そして、この充実した時間には、喜びがいつぱいつまっているのである。

そこを支配しているのは、小児の無邪気さなのである。彼は、そうしたいからそうするのであり、物質的な、あるいは精神的な何らかの報酬を求めているわけではない。

彼のすることは子供の遊びに似ている。子供が積み木遊びをするように、彼は何かをつくるのである。今まで、誰もがつくらなかったもの、誰もが、思いもつかないような新しいものを、彼は全く無邪気につくり出すのである。

どうして、ライオンは小児になりうるのか。この変貌の秘密について、ニーチェは何も語らない。彼はドラゴン、つまり伝統的価値との壮絶な戦いの中で、突如として、小児に変貌するというのみである。

私もその変貌の秘密をうまく語ることができない。私も自らラクダからライオンになり、ライオンから小児になることのできた人間だと自負しているものであるが、その変貌を自ら説明することはできない。

ただ、一つ言うことができる。それはけつして求めて得られるものではなく、向こうから、やってくるものであるということである。

私は、だんだん次のように思うようになった。人間が自らの力で何かをしようとしているうちは大したことはできない。向こうから自ずから出てくるものこそほんとうのものである。小児になろうとしたとてなれるものではない。真剣なライオンの戦いの中で、人は自然に小児になるのである。

(梅原猛「学ぶよろこび 創造と発見」より)

問一 ― 線部①「ラクダは重い荷物を背負って、乾き切った砂漠を歩く」とありますが、この表現は人間のどのような行動にたとえられますか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア おいしいおかずをつくるために、料理のたびに試行錯誤を繰り返すこと。
- イ 人生の長い距離を歩ききるために、負荷をかけて体力や筋力を鍛えること。
- ウ 自由で創造的な生き方をするために、常識を疑う勇気を持ち続けること。
- エ たくさんの知識を身につけるために、退屈な勉強でもがまんしてやること。
- オ 新製品を開発するために、自分とは違う意見をもつ人とも議論を重ねること。

問二 ― 線部②「ように」と同じ意味で使われているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 弟はバスに間に合うように出かけていった。
- イ 彼女のように勉強熱心な人は見たことがない。
- ウ 母の病気はよくなっているように感じられた。
- エ 「きつと合格できますように。」と彼女は願った。
- オ 彼の目は獲物を狙う鳥のようにするどかった。

問三 ― 線部③「小児は全く無邪気に、一切を始め、一切をつくる」とありますが、小児はどのようなものをつくるのですか。本文中から三十五字以上四十字で探し、最初の五字で答えなさい。(句読点も一字として数える)

問四 空欄 X に入る四字熟語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 無味乾燥 イ 絶体絶命 ウ 抱腹絶倒 エ 前代未聞 オ 問答無用

問五 ― 線部④「やはりそれは必要である」とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身に課した困難に耐える過程こそが大切であり、苦難から解放された今後の人生を考えれば結果などは大した問題ではないから。
- イ 忍耐強く修練してこなかったものは、これから先に訪れる苦しい戦いに耐え、創造という特権を手に行うことなどできないと考えるから。
- ウ 味気のない受験勉強をしている学生時代にはわからないことであつたが、学問の真理に触れた現在ならば勉強の喜びを伝えることができるから。
- エ 学者や芸術家といった創造的な人生を目指すものが若い時に勉強を怠ってしまうと、基本的思考法が身につかず大成には至らないから。
- オ もともと面白くないものを面白いと思える豊かな感受性がなければ、さらにアイデアが求められる創造の人生にはたどりつけないから。

問六 — 線部⑤「全世界を敵としなければならぬ」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 誰か一人が真理を発見したということは、ほかのすべての人間は真理を発見できなかったということになり、恨みを買うことになるから。
- イ 誰か一人が真理を発見したということは、その人をのぞく全員は間違いを信じていたということになり、反省せざるをえなくなるから。
- ウ 誰か一人が真理を発見したとしても、それをほかのすべての人間に論理的に証明するまでは誤謬として扱われるため、社会的に信用されないから。
- エ 誰か一人が真理を発見したということは、その人以外はみなこれまでの人生で正しいとしてきた考えの誤りを指摘されたことになり、反発が起こるから。
- オ 誰か一人が真理を発見したとしても、その人以外のすべての人はそれを根拠のない虚言きよげんだとみなし、決してだまされまいと抵抗してくるから。

問七 — 線部⑥「食うか食われるかの壮絶な戦い」とありますが、何と戦うのですか。これよりあとの本文中より五字で抜き出して答えなさい。

問八 — 線部⑦「このライオンの苦しい修行」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 真理を創造するために自分以外の関係を絶ち、一人で研究や思索に没頭する覚悟をもつこと。
- イ 誤謬との戦いの末に創造した真理が誰にも理解されないという孤独に耐えること。
- ウ 味方がいなくても、真理を創造するために孤独な勇氣を持って従来の考え方に対抗すること。
- エ 退屈な仕事でも途中で投げ出さず、一人でも最後までやり遂げようとする事。
- オ 二つの事柄のうちどちらが本当の真理なのかを一人でも見極められる判断力を磨くこと。

問九 ~~~~~ 線部B「ニセの小児」とはどのような人のことだと言えますか。~~~~~ 線部A「無邪気な小児」との対比をふまえて、★より後の語句を使って四十字以上五十字以内で説明しなさい(句読点・符号も一字として数える)。

問十 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちはどんな立場においても創造する喜びを味わうことができるが、そのような喜びを感じて仕事をしたり家庭で料理をつくったりしている人間は非常に少ないといえる。

イ これまでの人生で自分が積み重ねてきた経験を否定し、ニーチェのいう三つの段階を心がけて生きていくことによって、豊かで創造的な一生を送る可能性が高まっていく。

ウ 味気ない受験勉強に耐えられなかったとしても、それで創造への道が途絶えてしまうわけではなく、勇気を持って自力で何とかしようと思えば、創造の人生を手にすることができる。

エ 私たちは歴史上蓄積されてきた知識や知恵に頼らずとも、真理のために戦う勇気さえ持っていれば、無邪気に遊ぶ子どものような創造的な生き方ができるようになる。

オ 喜びに満ちあふれた創造の人生とは、追求しようとして得られるものではなく、真理探求のために勇気を持ってあらゆる努力を注ぎ続ける過程で突如獲得できるものである。

受験番号	
氏名	ふりがな

一

二

三

四

五

1	(てる)	2	3	4	5

一

1	(く)	2	3	4	5

二

1	2	3	4	5

三

問一	(1)	(2)	(3)	(4)

問二	問三	問四	問五	問六

問七	問八	問九	問十	問十一	問十二

問一	問二	問三

問四	問五	問六

問七	問八

問九	問十

問十

五

四

40

50

34

17